

唐宋時代陰陽書の研究（要約）

梁辰雪

本論文は、中國唐宋時代の陰陽書について、その性格を明らかにし、特に日本に所藏される陰陽書に関わる抄本を利用し、中國で散佚した唐宋時代の陰陽書の姿を復元しようとするものである。

陰陽書は、最初に諸子百家の陰陽家の書と、技術系の占ト書であった。隋に至り、陰陽家書は全て散佚し、陰陽書は専ら陰陽家の學說から影響を受けた技術系の占ト書を指すこととなった。唐の太宗皇帝の時に、呂才により秦漢から魏晉南北朝に至るまでの陰陽書が整理され、初めて官撰の陰陽書が編纂された。陰陽書は諸子の陰陽家書と技術系の占ト書を淵源とし、基本的に民間に由來し、變動性に富んでいるものであるが、唐から王朝の編纂物として權威性を持つようになった。その意味で、隋唐の陰陽書は秦漢以來の陰陽書と一線を畫すものであった。本論文は、まず官撰陰陽書の成立と展開の経緯を明らかにした。

また、中國においては唐宋時代の陰陽書が數多く散佚してしまっている。一方の日本では、中國から影響を受けた上に、學術の傳承は閉鎖的な集團内で行われたので、陰陽道文獻に唐宋の陰陽書の佚文や占術が含まれている。本論文は、日本に所藏された陰陽書の抄本について検討を加えることを通じ、失われた中國陰陽書のあり方を考えた。

全体の構成は、第1章「唐宋時代官撰陰陽書の成立と展開」・第2章「日本藏『新陰陽書』の研究」・第3章「日本藏『大唐陰陽書』の研究」・第4章「『大

唐陰陽書』に見られる朱筆曆注」で構成された。

第1章「唐宋時代官撰陰陽書の成立と展開」では、まず陰陽書はどのような書物なのかについて考察を行った。陰陽書は、最初に諸子百家の陰陽家の書と、技術系の占ト書であった。隋に至り、陰陽家書は全て散佚し、陰陽書は専ら陰陽家の學説から影響を受けた技術系の占ト書を指すこととなった。この類の書は民間に由来し、變動性に富んでいる。唐の太宗は、魏晉以來の學術を整理して、禮樂を制作しようとしたが、陰陽書の修訂もその一環であった。呂才が編纂した『陰陽書』は最初の官撰陰陽書であるが、早い時期に散佚してしまった。その佚文から見ると、呂才の『陰陽書』は少なくとも宅經・祿命・葬書と日時吉凶などの内容が含まれている。宋代に至り、眞宗は司天監に命じて、天文・地理・陰陽・術數書を修訂した上で、『乾坤寶典』を編集させた。唐宋の間に、占ト書が増加していたこともあって、『乾坤寶典』は500巻以上にもなった。清代になると、『星曆考原』6巻と『協紀辨方書』36巻が編纂され、最後の官撰陰陽書であるにもかかわらず、宋代の『乾坤寶典』より巻數がかなり減っているが、これは宋代以來占ト術が細分化したからである。例えば『乾坤寶典』の地理30篇は、修訂が加えられた後、『地理新書』という相宅相墓の専門的な占ト書として獨立している。占ト術全てを網羅するような陰陽書はあるが、それぞれが細分化することによって根本的に内容が減ってしまったのである。また、官撰陰陽書の編集者と利用者はともに王朝の占ト者である。占トは前近代の國家において重要なものであった。秦漢時代から専門的な占ト官吏が設置され、隋唐になると、太卜は日取りと墓の場所を決めることを擔當し、太史は天文と關係する占侯を擔當した。宋に至り、占トの官人はほぼ全て司天監（太史

局)に屬することになり、天文占侯と日取りや墓の場所を決定することは、すべて司天監(太史局)の職務となった。そして司天監(太史局)は占卜に關わる史料において、「經に依る」・「經法に依る」という記載がよく見られることから、占卜の參考書として用いられる經書は確實に存在し、それは官撰陰陽書である可能性が高いと言える。

第2章「日本藏『新陰陽書』の研究」では、『新陰陽書』と題する抄本を考察した。日本に『新陰陽書』と題する抄本は2種類あり、それぞれ宮内廳書陵部と早稻田大學圖書館に所藏され、ともに宅圖と相墓地法だけが残っており、住宅と墓の場所を選択する方法が記されている。そのうち、早稻田大學圖書館本は『新撰陰陽書』との外題がある。抄本は、唐の諱である「虎」を避けて「獸」に改めており、構文と内容は敦煌宅經と『地理新書』にも見られる。このことから、抄本のテキストは唐宋時代の陰陽書の一部であることと判明した。しかし、現在の資料狀況では、『新陰陽書』が『日本國現在書目錄』に著録された『新撰陰陽書』と如何なる關係があるのかは判斷し難い。また、日本の陰陽家の著作には、『新陰陽書』と類似する内容も含まれているため、このテキストは日本陰陽家に影響を與えたことがわかる。

第3章「日本藏『大唐陰陽書』の研究」では、『大唐陰陽書』卷32と卷33の抄本を考察した。日本には數種の『大唐陰陽書』卷32と卷33の抄本が所藏されている。それは2系統に分けられるが、そもそもは兩者とも天文博士であった安倍氏の藏本であった。現存した『大唐陰陽書』卷32・卷33は具注曆の曆注配當形式を示しており、月ごとに曆注の冒頭に七十二候・六十卦とある。これは『大衍曆』の七十二候・六十卦と一致している。一行は『大衍曆』を作

った際、七十二候・六十卦に対する大きな修正を加えたため、『大唐陰陽書』巻 32・巻 33 は『大衍曆注』であると考えられる。『大衍曆』の次に頒行された『宣明曆』は、曆注の部分を『大衍曆』から継承したため、『大衍曆注』は『宣明曆』にも適用されたと言える。日本で『宣明曆』は宣明曆貞享 2 年（1685）まで行用されたため、『大衍曆注』である『大唐陰陽書』巻 32・巻 33 も長い間に使い続けられた。また、抄本には唐の太祖である李虎と穆宗である李恆の諱を避けた改字があり、抄本の祖本は唐の穆宗が即位して以降に成立したと推測される。唐の陰陽書は時日を選択するものが含まれていたため、その中に曆注も収められたと思われる。しかし、『大唐陰陽書』の全本は必ずしも呂才『陰陽書』ではないとは言えず、呂才の『陰陽書』が『大衍曆注』の成立にともない、巻 32・巻 33 の曆注に対する修正を加えた可能性もある。

第 4 章 『大唐陰陽書』に見られる朱筆曆注」では、具注曆の参考書であった『大唐陰陽書』巻 32・33 にある朱筆曆注淵源に検討を加えた。朱筆曆注というのは、具注曆の上段の欄外に狼藉・滅門・大禍、上段に大將軍遊行・天一所在・土公所在・三寶吉・下食時、中段に神吉・伐・忌遠行・忌夜行・不問疾・五墓・八龍七鳥九虎六蛇がそれぞれ朱筆で施されているものである。日本の具注曆には、寛和 3 年（987）の具注曆と『御堂關白記』の長徳 4 年（998）の具注曆から朱筆曆注が現れた。これらの朱筆曆注は全体的に日本で附加されたものであるが、その思想の大本を辿ると、中國から大きな影響を受けたものがほとんどであった。唐宋の具注曆には大將軍遊行・土公所在は曆序に書かれ、五墓・八龍七鳥九虎六蛇は曆の下段に墨筆で記されていることからそれは窺い知れる。また、天一所在・下食時・忌遠行・忌夜行・不問疾などは漢籍に根據が

みられ、これらが日本で暦注となったのである。また、陰陽道の発展とともに、日本で獨自に三寶吉日・神吉日のような暦注が形成されもした。

以上に述べたように、陰陽書は、最初に諸子百家の陰陽家の書と、技術系の占ト書であった。隋に至り、陰陽家書は全て散佚し、陰陽書は専ら陰陽家の學說から影響を受けた技術系の占ト書を指すこととなった。官撰陰陽書は、最初に唐太宗の禮樂制作の一環として成立し、その後、王朝占トの中、日取りや墓の場所を決定する際に用いられる参考書となった。諸子の陰陽家書と技術系の占ト書を淵源とし、基本的に民間に由來した陰陽書は、唐から王朝の編纂物として權威性を持つようになったから、隋唐の陰陽書は秦漢以來の陰陽書と一線を畫すものであった。王朝占トに實用されたものであるため、官撰陰陽書の編纂は清まで續いた。唐宋陰陽書の佚文と現存した清の官撰陰陽書である『星曆考原』・『協紀辨方書』から見てみると、陰陽書は天文・暦注・相宅相墓と祿命などが含まれている。日本で現存した『新陰陽書』と『大唐陰陽書』卷 32 と卷 33 は、それぞれ住宅や墓を選ぶ書と、日取りを決める依據とした『大衍曆注』であり、ともに唐宋時代の陰陽書の一部と考えられる。

日本では、中國から影響を受けた上に、學術の傳承は閉鎖的な集團内で行われたので、陰陽道文獻に唐宋の陰陽書の佚文や占術が含まれている。本論は日本に所藏された文獻を利用し、失われた唐宋時代陰陽書の一部を復元した。また、これらの史料を利用する際に注意すべきなのは、日本で書寫された抄本である以上、日本から一定の影響を受けた可能性があり、例えば『大唐陰陽書』にある朱筆暦注は日本で附加されたものと思われる。